

出会い (20)

禅とキリスト教

- 老博士の涙 -

奥村 一郎

本誌『Vitalite』Vol.21 「真実一路」においてとりあげた「托鉢と荷車」のテーマはあたかも禅の公案ともいえる興味深い難問であることから、今またあらためてとりあげることにした。読者の所感をいただければ幸いである。

「老博士の涙」と題された知友西村恵信教授(京都花園大学学長)の興味深い一文を再度拝借させてもらう。

要点を記すと、「托鉢と荷車」という話。もう30年以上も遡ることだが、当時、機峰峻烈でその名を知られた禾山禅師が、ある日、数人の雲水と托鉢に出られたときのこと。途中、坂道にかかったところで、重い荷物を山ほど積んだ車がその坂を登りかねている。そこで、1人の雲水が托鉢の列からそれて、その荷車を後ろから押してやった。とそのとき、托鉢中めったにふりかえることのない老師がそれに気付かれるとさっさとひとりに寺に帰ってしまった。そして、「ただちに、彼を下山させろ」と命じられた。「修行者ともあろうものが、人の車などに気を引かれてどうする。そのような無道心者は修行する資格はない。ただちに、叩き出せ!」と言われた。しかし、下山してしまえば最後、門宿という罰をうけたまま、山門のところで座禅をして貼り続けてやっと独参だけ許された。

ところで、この逸話を、カトリックの中でもよく知られていた原田祖岳老師がその自叙伝のなかで絶賛しておられるのを読んで、一層共感を深められたのが西村先生だった。「実に実によい話ではないか。こう話しても涙がでるよ。師家もえらいが、修行者もえらい。これだけの親切な師家と、熱烈な求道者が現代果たして何人ありや。恐らく皆無ではなからうか...ああ!？」

ところで、当時、西村先生は、米国に留学、プロテスタントのクエーカー研究所に滞在しておられたので、早速、この素晴らしい禅修行のエピソードをクエーカーの人達に話された。だが、その反応は全く予期しないものであった。それこそ、1人の例外もなく、その話を全然理解せず、それどころか、困っている人を助けることこそが宗教者のとるべき道であり、理由の如何にかかわらず、その行為が咎められたり、罰せられたりすることは不可解であると反論された。更には、自己の修行のために隣人を顧みないような禅者のやり方は全く宗教的などとはいえない、と厳しく批判さ



奥村 一郎 / おくむら いちろう

1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。

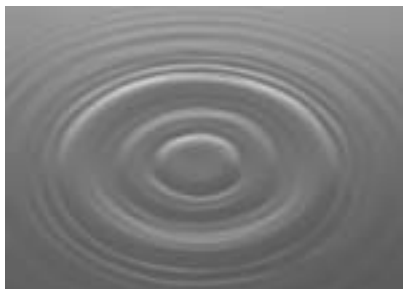
著書は、『断想』『主とともに』『祈り』(女子パウロ会)、『わたしの心よ、どこに』(サンパウロ)、『聖書深読法の生いたち』(オリエンズ宗教研究所)など多数。

れた。まさに禅キ衝突という思いがけぬ体験は、次にくる大拙先生との出会いが、西村先生自身にとって、貴重な開眼の機となる。

その頃、久し振りに帰国された大拙先生を囲んでの集いの折、西村先生はこの極めてパンチの効いた話を食卓で披露された。90歳を越えられた大拙先生は、じっと聴いておられたが、話が終わると、耳から手を離し、うつむいてしまわれた。気分でも悪くなられたかと同じびっくりしていると、先生は目頭に手をあて、感涙を抑えておられた。やがて口を開き「いや、そんな筈はない。そんな筈はないんだ。いくらキリスト教のものでこの禾山老師の慈悲が分らんわけではない」と、西村先生の話を強く否定されたという。一体、そのときの、老博士大拙先生は何を感じられたのであろうか。禾山和尚の慈悲の鉄拳に心を打たれたのか、また、原田老師との深い共感であったのか、あるいは、真実一路の道に徹する禅の修行を解せない浅はかなキリスト者にたいする悲しみであったのか。更にまた、先生ご自身の無功德行への反省であったのか、今はもう確かめようがない、と西村先生の文は結ばれている。

「托鉢と荷車」という、たまたま、街の一角で起きた一瞬の小さな出来事が、その後、数年にわたって広がる波紋を作り出した意味深い話題である。

鈴木大拙先生は同時代の著名なカトリックの神秘神学者トーマス・マートン(Thomas Merton)とも親交があり、中世の神秘主義を代表するエックハルト(Eckharts)についても関心をもたれ、それについての著作もある。長らく米国におられたことから、キリスト教についての確かな学識をもたれていた。勿論、禅学の道に生き抜かれた巨匠であっただけに、キリスト教についての批判的な記事も折に触れてみられた。しかし、上記の逸話を結ぶ「老博士の涙」には、キリスト者への共感を含む温かい理解が読み取れるのではなからうか? というのも、先生も熟読されていたに違いない



聖書には、上記の逸話に酷似する興味深いエピソードがある。「マルタとマリア」という2人の姉妹についての話である。

一行とともにイエスはある村に入った。すると、マルタという女が、イエスを迎え入れた。彼女には妹マリアがいた。マリアは主の足下に座ってその話を聴いていた。マルタはいろいろなもてなしのためせわしく働いていたが、そばに近寄って言った。「主よ、私の妹は私だけにもてなしをさせていますが、あなたは、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください」。主はお答えになった。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。必要なことは唯一つだけである。マリアはよいほうを選んだ。それを取り上げてはならない」。

(ルカ第10章：38 - 42)

マルタの咎めを退けてマリアを弁護するキリストは、まさに禾山禅師。食事の準備をするマルタは、荷車を押す雲水。キリストは、手伝うのはいけないといっているのではない。「必要な唯一つのもの」を見失うなど、キリストは戒める。禾山禅師も人助けが悪いといっているのではない。「本立って末生ず」、とか「本末転倒」という戒めの諺もある。

事実、まだ十分「脱自」の境地に達していないなら、せっかくの善行も隠れた自己満足になってしまう。そこを老師もキリストも見抜かれていたのかもしれない。

あとで、西村先生は面白いことをいわれた。「まだ悟ってもいないのに車を押すような奴は、地獄に行け！ 悟ったあとに、車を押さないような奴も地獄に行け！」。これも、ひとつの名(迷)答かも？ 未熟な雲水の親切は、いわば、未熟なマルタの不平と同じということである。

なぜ、叱られたかも分からないままに、「この師のみ」に従うしかないという確信に徹した雲水の心は、イエスの傍らにいる妹マリアへの女らしい嫉妬もまざったマルタの愛着にも通ずるものがあるのではなからうか。そのときのマリアの沈黙において、誰にとっても「必要な唯一つのもの」があらわにされた。言葉では表わせないままに。智徳兼備の老博士の涙には、この「時間と永遠」をつつむ人間の魂の深淵が映しとられていたのではなからうか！

P.G.I.のお知らせ

「プラチナプリントの輝き」展 The World of Platinum Prints

2002年1月10日(木) - 2月28日(木)

プラチナプリントは1873年に発明された写真印画法のひとつです。現在活躍している内外の写真家たちがその特有の豊かな調子を活かしてそれぞれに個性的に表現したプラチナプリント作品は、ノブルな輝きによって写真そのものの美しさを引き出しています。出品作家10名、約40点を展示します。

小畑雄嗣 写真展 BIRD OF PARADISE : MADEIRA

2002年3月5日(火) - 29日(金)

2002年1月より営業日・営業時間が変わります

フォト・ギャラリー・インターナショナル

東京都港区芝浦4-12-32 TEL.03-3455-7827 FAX.03-3455-8143
JR田町駅芝浦出口(東口)より徒歩10分 [入場無料]

【営業日】月 - 金 【休館日】土・日・祝日

【営業時間】11:00 - 19:00

* P.G.I. についての詳しい情報はホームページ(<http://www.pgi.ac>)をご覧ください。

表紙の写真



写真：クリス・スティーヴン・バーキンス
アフガニスタン、1998年
写真提供：マグナム・フォト東京支社

アフガニスタンのタリバン政権は、戒律の極めて厳しいイスラム原理主義を信奉する。その影響を最も受けているのが女性たちだ。

就労禁止、教育禁止...そして、外出時のブルカの着用。ブルカとは、目の部分だけがメッシュになっている頭からつまさきまでをすっぽりと覆うベールのことである。ブルカを着用して歩く女性の姿は、そのままタリバン政権の象徴のようだ。

20年以上にわたる内戦と過酷な差別政策の中で、女性たちは精神的・肉体的にも傷を負いながら生きている。

米軍の介入により力を取り戻した北部同盟の手で、首都カブールが陥落した。厳しい統制から解放された市民は、音楽を流し歌い、男はひげを剃り、女はブルカを脱いだ。しかし、これが本当の平和だと信じる市民は少ない。

ブルカを着用した彼女の姿は、バーキンスの乾いた視線の中で、なお強烈な存在感を放つ。メッシュの奥にある彼女の視線の先に、真の平和が見えてくることを願ってやまない。

(編集部)